

2019. 7. 15

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 33

目次

- 1) 支部長挨拶と新役員紹介 「中庸」としての支部と私～新支部長挨拶にかえて～
(支部長：吉武正樹)

- 2) 今年度の支部活動予定
 - ① 第26回九州支部大会開催のお知らせ(福岡女学院大学 池田理知子)
 - ② 紀要17号の経過報告(前紀要担当運営委員：平野順也)

- 3) 会員からのメッセージ
 - ① 退職を迎えて思うこと(日本文理大学 清水孝子)
 - ② Today we celebrate our Independence Day!
(コミュニケーションスキル協会代表理事 野中アンディ)
 - ③ 研究テーマとしての「恋愛」～自己紹介にかえて～
(西南学院大学大学院 博士後期課程 友池梨沙)

- 4) 支部会員の出版図書の紹介
塙幸枝著
『障害者と笑い—障害をめぐるコミュニケーションを拓く』2018年9月 新曜社
(神田外語大学 塙幸枝)

- 5) 編集後記

1) 支部長挨拶と新役員紹介

「中庸」としての支部と私～新支部長挨拶にかえて～

支部長：吉武 正樹（福岡教育大学）

令和元年というこの時代の節目に、JCA九州支部長をお引き受けすることになりました。

「お引き受けすることになった」とはあまりにも「意思」がないとリベラルな立場からお叱りを受けるかもしれませんし、一方「人間の理性は万能ではない」とする保守の立場からは謙虚な表現だということもできます。私としては、半分は理性で説明できない「ご縁」、半分は自身の「決断」という気持ちです。良く言えば「あらゆる立場に理（ことわり）を見出す」、悪く言えば「優柔不断」というこの性格は、アラフィフとなった今、簡単には変わりません。強いリーダーシップはまったく期待できませんが、自分なりの「中庸」を貫いていくことができばと思っています。

先日、南山大学で開催された日本コミュニケーション研究者会議に出席してきました。今年はコミュニケーション教育の歴史を振り返るシリーズの3回目で、日本のコミュニケーション研究の成り立ちをアメリカにおける展開とともに通時的かつ共時的に読み解きつつ、最後はコミュニケーション研究者のアイデンティティについて深く考えさせられる機会となりました。

「学際的事であること」、つまり、領域横断的事であることは、これまでコミュニケーション学のアイデンティティとして肯定的に評価されてきました。確かにそういう面もあります。一方、こういうある意味「寄生的」な形での学際性は（悪く言えば）コバンザメやハイエナのようにでもあり（コバンザメやハイエナの存在を否定するつもりは全くありません）、冠に「コミ

ュニケーション」と謳っている学会の自己の起ち上げ方としては、脆弱すぎる気もします。この謙虚さは強みでもあり、弱みでもあり、まるで優柔不断な自分を見ているようです。

「コミュニケーション」という概念は、現代社会の鍵の一つであることに間違いありません。最近では、大澤真幸氏（2005年全国大会基調講演者）が『コミュニケーション』（弘文堂、2019）と題した本を出版されました。また、綾屋紗月氏が編集した『ソーシャル・マジョリティ研究—コミュニケーション学の共同創造』（2018、金子書房）という本も出ています。大澤氏は社会学者であり、綾屋紗月氏は、去年の全国大会基調講演者であった向谷地生良氏が提唱する「当事者研究」の研究者です。私たちは確実に、これらの学問や研究者と地続きの関係にあります。しかし、『コミュニケーション』と題した本や副題に「コミュニケーション学」と謳う本は、まもなく50周年を迎えようとする日本コミュニケーション学会の関係者から出されてもおかしくない、いや、出されるべき本であった、という思いも捨てきれません。

学会は研究者の交流の場ですが、同時に、社会に対してその知を還元できなければ、いずれ淘汰されていくことでしょう。「コミュニケーション」の学会であれば、単に「コミュニケーション」という言葉に群れる集団であっては事足りません。より徹底的に「コミュニケーション」という概念にコミットし、深め、世の中のコミュニケーション現象について「独自」の視点を提供していかなければなりません。これからのJCAは、より自律的に存在意義を模索して

いく必要があるのではないのでしょうか。

この原稿のメ切り、早稲田大学名誉教授で文芸評論家の加藤典洋氏逝去のニュースが飛び込んできました。氏の著作に刺激を受けてきた私としては、71歳という早すぎる別れに、残念でなりません。執筆前に氏を惜しむ声をネットで読んでいた際、加藤典洋著『言語表現法講義』（1996、岩波書店）に対して高橋源一郎氏が寄せた感想を目にしました。著作名にある「法」という表現について、高橋氏は以下のように書いています。

加藤さんは、「言語表現法」という授業を大学でやって、それは「言語表現」を学生に教えることなんだが、なぜ「法」かという、言語表現「学」ならほとんどが「頭」で考えるだけの理論になり、言語表現「論」なら少し実践的になって「手」を通じて、つまり実際に書くことを通じる度合いが多くなり、そして言語表現「法」では「頭」と「手」がフィフティ・フィフティになるといっているが、「手」の割合がさらに多くなっていくとハウツーに近い「術」になると付け加えた、ぼくはこの辺を読んでいてなんだかニッコリしてしまった…

(ALL REVIEWS

<https://allreviews.jp/review/889>)より

加藤氏が『頭』と『手』がフィフティ・フィフティになる」という思いを「法」という表現に込めたこの話は（「頭と手」を「脳と身体」や「理論と実践」、「理性と経験」と読み替えてもいいでしょう）、今後の支部の在り方を考えるうえで参考になります。つまり、「支部とは、特に地域に根差した学術コミュニティである」という意味で、学界と生活世界をより積極的に媒介するものである」という在り方を提示しているように、私には思えるのです。

もっとも私自身は、同様にそれらの融合を試みたカントや、「中庸」を重んじた孔子やアリストテレスのようにはなれません。支部の船出においても、さっそく前支部長の池田理知子先生や新事務局長の横溝彰彦先生にお世話になりっぱなしですが、役員を快く引き受けてくださった以下の先生方とともに、支部長として私らしく中庸を渡り歩きながら2年の任期に臨みたいと思っています。皆様におかれましても、単に「乗客」としてではなく、ぜひ「クルー」として「乗船」していただきますと幸いです。

副支部長	平野 順也（熊本大学）
事務局長	横溝 彰彦（久留米工業高等専門学校）
副事務局長	吉村 美路（愛知東邦大学）
運営委員	
総務担当	池田 理知子（福岡女学院大学）
研究紀要担当	埴 幸枝（神田外語大学）
ニューズレター担当	仲里 和花（沖縄キリスト教学院大学）
会計監査	高瀬 文広（日本赤十字九州国際看護大学） 筒井 久美子（立命館アジア太平洋大学）

2) 今年度の支部活動予定

①第 26 回九州支部大会開催のお知らせ

池田 理知子 (福岡女学院大学)

第 26 回九州支部大会を 2019 年 11 月 2 日 (土)、福岡女学院大学 (福岡市南区日佐 3-42-1) で開催します。今回の大会テーマは「メディア・コミュニケーション～ローカル・メディアの役割」で、私が所属する人文学部メディア・コミュニケーション学科の後援をいただいております。

昨年までの 4 年間、「公害」「戦争」「記憶」をキーワードに支部大会で議論を積み重ね、一定の成果が上がった後の年次大会なだけに、テーマをどうするのか非常に迷いました。これまでのテーマとの継続性を意識しつつ、かつ別の切り口からコミュニケーションの問題を考えるにはどうしたらよいか、結局、吉武先生と横溝先生にご相談したうえで今回のテーマに決定しました。

プログラムの詳細はこれから詰めていかなければなりません、基調講演は元熊本日日新聞社の高峰武氏にお願いし、快くお引き受けいただきました。その基調講演を受けて、さらに議論を深めていくための方策を同僚の林田真心子氏と現在練っているところです。

ここで、基調講演者の高峰氏のプロフィールをご紹介します。まずは、高峰氏の著書である『8のテーマで読む水俣病』(2018年 弦書房)からの引用です。「1952年熊本県玉名市生まれ。早稲田大学卒。熊本日日新聞社編集局長、論説委員長、論説主幹を経て現在、論説顧問。著書・共著に『ルポ精神医療』(日本評論社)、『検証ハンセン病史』(河出書房新社)、岩波ブックレット『水俣病を知っていますか』、

『熊本地震 2016 の記憶』(弦書房)がある。現在は新聞社の論説顧問のほか、熊本大学の非常勤講師、熊本学園大学非常勤講師、同大学水俣学研究センターの客員研究員としても活動されています。これまでの幅広い取材活動などを振り返っていただき、ローカル・メディアとはどのような役割をこれまで果たしてきたのか/果たさなければならないのか、ご自身の考えを存分に語ってまいります。そして私たちコミュニケーションを研究・教育する者が、そこにどのようなコミュニケーションの課題を見出し、考察を進めていくのかななどを議論していきたいと思っています。



論文発表やパネル企画の申込締切は、8月31日(土)です。九州支部以外の方の発表も大歓迎ですので、ご一考いただければと思います。また、久々の福岡市での開催です。多くの大学院生の発表も期待しています。11月に福岡でぜひお会いしましょう。

*画像は弦書房のホームページからの引用です。<http://genshobo.com/?p=7744>

(アクセス日: 2019年5月17日)

2) 今年度の支部活動予定

②紀要 17 号の経過報告

前紀要担当運営委員：平野 順也（熊本大学）

まずは、『九州コミュニケーション研究 第 16 号』に寄稿していただいた石橋嘉一先生、横溝彰彦先生、そして新海智広先生に、この場を借りてお礼申し上げます。また、『第 16 号』を充実したものにするために、ご協力いただいた編集委員の先生方及び池田理知子先生にも心より感謝申し上げます。

さて、9 月末日に刊行が予定されている『九州コミュニケーション研究 第 17 号』の編集作業は順調に進んでいます。今回は計 5 名の先生方から研究論文そして研究発表論文の投稿がありました。現在、投稿していただいた論文の修正をお願いしているところです。それぞれが非常に興味深い内容の論文です。9 月末には HP 上で公開されますので、ご一読いただければ幸いです。

今回も「特別企画」を掲載いたします。これまでも、ニューズレターでお知らせしたように、九州支部では積極的に議論の場を「学会」外へと拡大してきました。特に、第 22 回大会より支部大会のテーマを九州の環境問題や戦争史に焦点あて「学会」と「社会」のつながりの構築に取り組みました。これは計 4 回のシリーズとして開催され、昨年大分で開催された第 25 回支部大会で一旦完結しました。『九州コミュニケーション研究』では『第 14 号』、『第 15

号』、『第 16 号』で、支部大会で行われた議論を中心にまとめた「特別企画」として掲載してきました。『第 17 号』ではこの 4 年間の取組みを総括するために、各支部大会の実行委員長、シンポジウム・パネルディスカッションの企画した先生方から寄稿していただき、「社会、記憶、コミュニケーション学」と題された「特別企画」として掲載いたします。多くの先生方にご協力していただいた場合、この「特別企画」は『第 17 号』内に掲載するのではなく、『別冊』として刊行します。過去 4 年間の活動の集大成としての「特別企画」にご期待ください。

最後になりますが、『第 17 号』をもちまして、編集員長の任期がおわります。これまで貴重な研究結果を投稿していただいた先生方、査読を担当していただいた先生方、そして編集委員としてご協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。『第 18 号』からは塙幸枝先生に編集委員長を担当していただきます。日本コミュニケーション学会の支部の中でも、研究紀要を刊行しているのは九州支部のみです。このような貴重な活動を今後も継続していけるように、皆様のご協力をお願いできれば幸甚です。それでは、塙先生、今後はよろしく申し上げます。

3) 会員からのメッセージ

①退職を迎えて思うこと

清水 孝子（日本文理大学）



3月末で勤務校（日本文理大学）を退職しました。常勤職として24年、それ以前の非常勤講師時代を含めると、30余年を勤務校で過ごしたことになります。1994年に、日本文理大学で「アジア太平洋地域理解のための異文化間ワークショップ」を開催したことがきっかけで、その参加者の畠山均先生と出会い、JCA九州支部の会員となりました。その後、大分で5回の支部大会を開催し、JCA九州支部が研究活動のホームグラウンドになったように感じています。4月から、大分市内にある短期大学などの非常勤講師として、週に3回ほど英語教育でのお仕事を続けています。歩いて通勤できるので助かります。

勤務校で働いた歳月は社会のめまぐるしい変化を実感した時であったようにも思います。詩人の荒川洋治が、「ひとつの方向に時代が流れ、もうどうにもそれにさからえなくなったとき、日常のひとつひとつの行為や思いは、どのようなものとして人の気持ちのなかにおさまるのだろうか」ということを言うておられました。「自由がうばわれ、考えることがひとつにされてしまった時代にゆるされる小説はどのようなものであったのだろうか」、と問いかけていました。「ひとつの方向に時代が流れる」という極端な例は、戦時中であるということに疑いの余地はありませんが、現代の世界や日本の動きを見ていると、「ひとつの方向に時代が流れる」という同じ構図を考えずにはいられません。教育に携わる者として、社会（産業界や政治の世界）の流れに抗うことなく教育内容が

決められ、ひとつの方向に流されていく危機感をいただてきました。そんな思いが最近の研究活動につながってきているように思います。現在取り組んでいるテーマは戦後の大分の教育改革。大分サイドと米国サイドの資料を読み比べ、民主化がどのように進められてきたかを検証するために文献調査をすすめています。たとえ米国主導の教育改革であったとしても、大分の人々もただ黙って従っていたわけでもなく、声を挙げていたことが読み取れてとても興味深いです。

知識やデータを習得する「ラクダの時代」、ラクダのように何も疑いをもたず、勉強に専心する時代。次の段階は、勤勉な努力を経て得た教養や知識をもとに自分自身の力で何かを創造していく「ライオンの時代」。この時代は必然的に大変孤独感におそわれることとなります。「ラクダの時代」と「ライオンの時代」を経た後にめざすべき時代は「小児の時代」。「ライオンの時代」で必要とされた孤独に耐える勇気を超越し、無邪気な心と自由を獲得する時代。エゴを排除し、他人のために喜んで働くのが「小児の時代」という段階です。竹内均による人間の精神の3段階をずっと心に留めてきました。ニーチェの著書の冒頭からの引用です。今後は、健康に気をつけながら、できれば「小児の時代」に移行できるように、他人（地域の人々や家族など）のためにより多くの時間を使っていければと思います。皆様のおかげで、退職を無事迎えられたことを感謝申し上げます。

3) 会員からのメッセージ

② Today we celebrate our Independence Day !

野中 アンディ (コミュニケーションスキル協会)



早いもので、私が准教授を辞めて2年が過ぎました。そして2019年には非常勤講師も辞めてしまいました。風の便りに、「野中君はアンディなんかにか名前を変えてしまったけど、もう消えてしまったんじゃないの」と噂が流れているらしいと聞きました。ところがどっこい、生きていますし元気にやっております。現在の肩書きはコミュニケーションスキル協会(CSA)という一般社団法人の代表理事です。どちらかというと以前よりも元気になり、イキイキとしています。今回は独立することで、あれほど暗かった私がどうして明るくなったのかを大暴露します。

そもそも私が大学を中途退職した最大の理由は、コミュニケーション学を日本に広めることでした。これはこのニューズレターを読まれている皆様が同じ熱量で感じられているはずだということは重々承知をしています。大学の教員をしていると企業や自治体から講師と呼ばれることがありますね。コミュニケーション能力について話をしてほしい、などと依頼があります。その際、打ち合わせなどで古代ギリシャ時代にルーツを持つこの学問を説明したら、「ああ、コーチングみたいなものですね？」と一言でまとめられそうになります。「違うんだけどなあ」と思うことが多々あり、「いっそ自分が社会に飛び出て布教活動するか!」と思ったんです。私は研究者としては大した業績もありませんし、立派な教師でもありません。難しい研究は他の先生方に任せて、自分にできることを考えました。私は生来目立つことが好きで、かつ人に使われるのが嫌いだという我儘な性

格です。自らをブランディングし放題だからストレスがなくなりました。

私がこの2年間でやっているのは主にプレゼンテーションの指導です。当然パワーポイントの作り方ではありません。でも、日本人は資料作りがプレゼンテーションの準備だと考えていますのでそこから教えます。introduction → body → conclusion の型を教え、thesis statement と topic sentence の必要性を伝えます。欧米で行われているパブリックスピーキングの授業そのものです。その上、受講生や企業にはその延長にあるコミュニケーション能力の向上を理解してもらっています。上記の書き方を知っている社会人はこれまで会った中で一人もいませんでした。アカデミックな世界では広く知られているこの書き方ですが、日本ではほとんど紹介されていないのです。日本人の多くが憧れていた、いえ、未だに憧れているスティーブ・ジョブズのiPhoneのプレゼンテーションがすべて基本に忠実に話されていたことに気づかずに…

日本ではブレインストーミングが文章を書くためにあることも知られていません。ブレストなどと略されるのは研修などで、みんなで考えをひねり出すことと同義のようです。だからブレインストーミングをして論理的に展開できる原稿を書いて示すと例外なく驚かれます。そして修辞です。日本語では同じ単語を何度繰り返しても気にしない傾向がある上、語尾に「状況」や「状態」、または「現状」ばかりだということに気づいていません。重複表現を避け、上手い言い回しを用いることで信頼性が上

がる、つまりアリストテレスが 2500 年前に言っていたことを日本人はまだ知りません。

プレゼンテーションだけではありません。経団連の調査によると、企業が社員に求める能力として最上位に挙げられるのがコミュニケーション能力。しかもこれが 16 年連続です。16 年間この国は何をやっていたのでしょうか。この課題を何とか解決しようと、みな自分の経験からコミュニケーション能力についていろんなことを考えたようですが、どれも本質からはズレています。「聞く力が必要」だとか「話の引き出しが多い」、そして「空気を読む」がコミュニケーション能力だと口をそろえて言います。それに迎合した研修がたくさんできましたが、せつかくの対人コミュニケーションの研究結果が全く知られていません。そしてコミュニケーション能力の本来の定義である「効果的、かつ適切なコミュニケーション」はプレゼンテーションの原稿を書き実践するまでの **Rhetorical canon** に集約されるのです。

私が目指すのは日本人の伝える力の底上げです。だから「プレゼンのレシピ」という本を書きました。パワーポイントが無くてもまともに、かつ世界基準でプレゼンテーションができるようになるための手引書です。実は、内容はコミュニケーション学の基礎を書いただけです。なぜならこれまで教科書ではない、ビジネスパーソンが簡単に手に取れる本がなかったからなのです。私はこの本をビジネス書にすることにこだわりました。少しでも多くの方に買っていただこうと、CSA のホームページから購入すると動画で私が説明するという特典も付けました。ネット上のどこかに「言葉のスキル診断」や「あなたのコミュニケーションタイプを無料診断」といったクイズ感覚の記事もいくつか見つけることができます。この学問を広めようと私が作りました。そして毎日メールマガジンを配信しています。

そんな記事を読んでくれる人たちが私の講座を受けてくれます。講座はオンライン会議システムの zoom を主に使います。18 時間の講座の中で 1 分自己紹介、3 分エレベーターピッチ、7 分情報

伝達プレゼン、そして 7 分説得プレゼンを行います。1 分、3 分までで 2 級講座、2 種類の 7 分プレゼンが 1 級講座です。最近では福岡だけでなく東京にもお客様が増えてきて、セミナーをすると満員になることも珍しくなくなりました。

全くゼロから新しい何かを作り出す。日本社会のためになる。そして誰からも指示されない。大好きなコミュニケーション学を教えながら独立したら、ストレス由来の帯状疱疹や不眠症から解放されました。この記事を読んでいる方も、もし副業が許されるのであれば是非 CSA の講師になりませんか？一度ホームページを覗いてみてください。

CSA ホームページ <https://commskill.net/>
言葉のスキル診断

https://www.reservestock.jp/page/fast_answer/4561

コミュニケーションタイプ診断

https://www.reservestock.jp/page/fast_answer/4250

* 画像は <https://www.amazon.co.jp/プレゼンのレシピ-仕事に差がつく-欧米式プレゼンの手順とテクニック-野中-アンディ/dp/4331521141/> からの引用です。

(アクセス日：2019 年 6 月 26 日)



3) 会員からのメッセージ

③研究テーマとしての「恋愛」～自己紹介にかえて～

友池 梨沙（西南学院大学大学院 博士後期課程）



「私、恋愛について研究しています」。こう言うと、大抵の人は私の研究に興味を示し、恋愛に関する自分の経験やそれに基づく考えを共有してくれます。話し終える頃には、初対面の相手でも不思議と心の距離がぐっと縮まるような気がするのです。「恋愛したことがない」という人はいても、恋愛について一度も「考えたことがない」という人はほとんどいないでしょう。

そんな私たちの生活の中にどっしりと腰を据えている「恋愛」ですが、その存在はあまりにも当たり前すぎて、「恋愛」そのものに意識が向けられることはありませんでした。「彼氏／彼女が…」「好きな人ができたんだけど…」「この間の合コンで…」といった話の最中に「恋愛とは一体何だろうか」などと議論する人はほとんどいません。しかし、この「恋愛とは一体何だろうか」という根本的な疑問はコミュニケーション学において非常に重要な研究テーマになりえると私は考えます。

「恋愛結婚が結婚の約9割を占める中、恋愛しない若者が増えたことで日本は未婚化が進んでいる。その背景として『恋愛＝面倒なもの』と捉える若者が多くいる」。近年よく目にする主張ですが、私には最後の『恋愛＝面倒なもの』と捉える若者が多くいる」という文が気になります。どうして日本人の若者は「恋愛＝面倒なもの」と認識するに至ったのでしょうか？この疑問に対する答えを探る鍵となるのが正に「(若者にとって) 恋愛とは一体何だろうか」という問いかけであり、これはコミュニケーション学的観点から恋愛研究を進める意義にも

繋がります。

人々の間で共有されている「恋愛とはこういうもの」という「当たり前」は、文化によって大きく異なり、常に変化しています。特定の文化内で共有されている「当たり前」は連続的なコミュニケーションの産物であり、日々作られ、変化し、壊され、また新たに作られます。例えば、とあるカフェで行われている3人規模の女子会での恋バナさえも「日本人にとっての恋愛の当たり前」を構築・再構築するのに少なからず貢献していると言えるでしょう。また、「恋愛の当たり前」に従って他者とコミュニケーションを図る人も少なくありません。今ではインターネットで検索すれば、デートの誘い方から告白にふさわしいセリフまで何でも教えてくれます。これらに則って行動する人が増えれば、「恋愛の当たり前」は再生産されるでしょう。このように考えると、今まで見えてこなかった恋愛の新たな側面が見えてきそうです。これまで日本の恋愛研究は心理学や社会学を中心に進められてきましたが、今こそコミュニケーション学的観点から考察することで、「恋愛とは一体何だろうか」の答えに近づくことができると信じています。

自己紹介というより自身の研究紹介になってしまいましたが、新人研究者として自分の研究テーマを紹介するのが一番かと思い、紹介文とさせていただきます。今後、学会等で会員の皆様にお会いできることを心待ちにしております。どうぞよろしく願いいたします。

4) 支部会員の出版図書の紹介

埴幸枝著

『障害者と笑い—障害をめぐるコミュニケーションを拓く』

2018年9月 新曜社

埴 幸枝 (神田外語大学)

『障害者と笑い』というこの本のタイトルを見て、違和感を抱く人も多いかもしれない。それは一般的に「障害者」と「笑い」が結びつきにくいテーマだと考えられているからである。しかしそのような感覚にこそ、私たちが知らず知らずのうちに身につけた「常識」や「決めつけ」が映し出されているともいえる。

本書の目的は「笑い」という事象をとおして障害者に向けられた社会的なまなざしを探ることにある。その手がかりの一つとして、本書では『バリバラ (バリアフリーバラエティー)』(NHK)¹というテレビ番組を分析している。というのも、『バリバラ』は従来の障害者像を打ち壊すべく、いくつかの画期的な試みを実行してきたからである。たとえば障害者のパフォーマーがお笑いパフォーマンスをおこなう「SHOW-1 グランプリ」なる企画では、従来、乖離的な関係におかれてきた「障害」と「笑い」の関係を問い直す意図が認められる。テレビで障害者がお笑いパフォーマンスをしていたら、それを笑うことはできるだろうか。「障害者を笑ってはいけない」という教えを受けてきた人の多くは、初めて目にする光景に違和感を覚えるかもしれない。では、その違和感をストレートに表明することはできるだろうか。「障害者はかわいそうな存在である」という規範を内面化してきた人の多くは、「がんばる障害者」に共

感して笑えるふりをするかもしれないし、自分がなぜ違和感を抱いたのかを考えることすらしないかもしれない。

しかし、『バリバラ』が提起する笑いに真摯に向き合おうとする場合にも、なお視聴者には心理的なハードルをもたらすいくつかの要因が残されている。それは『バリバラ』の笑いが「障害者」から「健常者」へ向けられたものであるという点、すなわち、



「障害者に無理解な(健常者中心の)社会」を批判する志向性に起因する。もしかしたら自分も、障害者を困難な状況に追いやってきた社会に加担してきた一人なのではないか——『バリバラ』のパフォーマンスをみる人の多くは、そう自問自答せずにはいられないはずだ。本書のねらいは、「笑えない」という感覚を丁寧に紐解いていく作業をつうじて、そのよりどころとなっている価値基準や社会構造を明らかにすることでもある。

最後に、本書が扱う「障害者と笑い」というテーマは、コミュニケーション論、メディア論、障害学といった学問領域を横断するも

情の対象として描かれ続けてきたことを批判し、新たな障害者像を積極的に打ち出してきた。

¹ 2012年4月放送開始。出演者のほとんどが障害者で構成され、「障害者情報バラエティー」という位置づけが示すようにバラエティ番組の形式を用いている。障害者が感動や同

のである。多くの書店で本書が「医療書コーナー」に配置されている状況は、「障害」というテーマがしばしば医学の範疇において語られてきたことを示唆しているが、むしろ本書の企図は障害をインペアメントとしてのみ捉えるのではなく、その社会的障壁（ディスアビリティ）としての側面に目を向けることにある。その意味で、本書は当然、障害学の視点を含んでいる。また、そうした社会的状況を作り出す要因の一端にメディア表象の問題が関与していることを指摘し、テレビ番組などの分析をつうじて障害者ステレオタイプが形成されてきたプロセスを明らかにするという点では、メディア論的な視点もはらんでいる。しかし、そもそも「笑い」が極めて高度なコミュニケーション行為であること、そして

て、何かを笑えたり笑えなかつたりする自身の些細な感覚に向き合うこと自体が一つのコミュニケーションであることを考えれば、サブタイトルの「障害をめぐるコミュニケーションを拓く」が示すように、本書はやはりコミュニケーション論の領域に位置づけられる研究であるだろう。「障害者と笑い」というテーマの「わかりにくさ」と対峙することが、読者にとって「常識」や「決めつけ」を問い直す一つのきっかけになれば幸いである。

*画像は、<https://www.amazon.co.jp/障害者と笑い―障害をめぐるコミュニケーションを拓く-壺幸枝/dp/4788515903/>からの引用です。

(アクセス日：2019年6月26日)

5)編集後記 仲里 和花 (沖縄キリスト教学院大学)

今年、初めて支部運営委員として、ニューズレターを担当することになりました。最初、吉武先生からこの話を頂いたときは、ニューズレター編集は初めての経験だったため、私にできるのだろうかという戸惑いもありました。しかし、九州支部会員になって8年目、九州支部のために何かお役に立てることがあれば、という思いで引き受けました。また、前任者の横溝先生は、様々な方への原稿依頼などの連絡を通して、人脈を広げる良い機会になりますよ、と勧めてくださいました。ニューズレターは、支部

会員間の情報共有と交流という目的があり意義のある業務です、と述べていた横溝先生の意を引き継ぎ、なるべく多くの支部会員の方々の自己紹介、研究報告、近況報告などを発信し、支部会員間のコミュニケーション活性化のために、ニューズレター編集業務に携わっていきたいと思っております。また、情報共有、交流を促進するうえで、ニューズレターに関して、何か良いアイデアがありましたら、お知らせください。今後とも、よろしく願いいたします。

発行元：

日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒830-8555 福岡県久留米市小森野 1丁目1-1

久留米工業高等専門学校 一般科目(文科系) 横溝彰彦

電話：0942-35-9300(代表) メール：kyushu@caj1971.com

URL：<http://www.caj1971.com/~kyushu/>